



Title	ハンガリー人日本語学習者の中間言語の音韻分析 : 音声教育の観点から
Author(s)	Kozma, Katalin Anna
Citation	大阪大学, 2006, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/58805">https://hdl.handle.net/11094/58805</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	Kozma Katalin Anna
本籍 (国籍)	
学位の種類	博士 (日本語・日本文化)
学位記番号	甲 第 64 号
学位授与年月日	平成18年9月27日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 課程博士
研究科及び専攻	言語社会研究科言語社会専攻
学位論文題目	ハンガリー人日本語学習者の中間言語の音韻分析 － 音声教育の観点から
論文審査委員	主 査 教 授 上 田 功 副 査 教 授 郡 史 郎 副 査 教 授 杉 本 孝 司 副 査 教 授 嶋 本 隆 光 副 査 教 授 早稲田 み か

## 論文の内容要旨

第2言語習得では学習者がさまざまな問題点に直面する。母国語と目標言語を比較すると、相違点と類似点がわかるが、実際にはどんなところが問題になるのかを完全に予測することはできない。Lado(1957)の Contrastive Analysis Hypothesis(CAH)にかわり、普遍的な言語規則に基づく Markedness Differential Hypothesis (MDH) (Eckmann 1977) が第2言語習得で現れる問題点を予測するものとして現れてくる。

それにもかかわらず、学習者の発話とその第2言語の母語話者の発話は同じことを表したくても、発話が同じにはならない (Selinker(1972))。その目標言語の社会的規範とは別個に、独自の独立的体系をもっていることを中間言語と呼んでいる。中間言語に影響を与えるものは、母語からの転移、普遍的な言語規則、学習者の年齢、L1 言語習得の過程、一般化、近似 (approximation)、難問を避けること、話す人の立場、状態である。中間言語は母国語と目標言語からも独立したものであるが、どの程度まで異なるか、どの程度まで独立的であるか、および中間言語はほかの言語と同じように自然な言語であるかどうかといことを Eckmann (1981) が調べ、中間言語は自然な言語と同様に普遍的な言語規則に従うことを Stuctural Conformity Hypothesis で主張した。

Eckmann (1981)の実験からすると、英語習得の場合に、スペイン語母語話者が Terminal Devoicing、中国語母語話者が Schwa Paragoge を使用した。筆者の疑問は、目標言語が同じで、なぜある母語話者がある中間言語的な規則を適用し、ほかの母語話者がほかの中間言語的な特徴を用いるのかという点である。以上のことから考えると、中間言語は、母国語と目標言語、どちらからも本当に独立したものであるのか。普遍的な規則と言語習得の心理学習的な過程は言語にかかわらず同じように働くので、それ以外の中間言

語を基本的に決めることは母国語の言語体系と目標言語の言語体系の相互作用ではないだろうか。

この仮説を完全に証明するためには、同じ目標言語を習得する、母国語が異なる学習者の間に実験を行う必要がある。しかし分析と正確な結果を得るために、被験者のいろいろな母国語の言語体系をよく知らなければならないので、このような研究は非常に複雑で時間がかかるものであるため、本稿ではハンガリー人日本語学習者の中間言語を音韻的に分析し、中間言語が母国語のハンガリー語と目標言語の日本語に何か関係があるのか、どちらの言語からも独立したものであるのかを調べてみる。他の目的は、ハンガリー人日本語学習者の発音上の問題点を明らかにすることである。

被験者はハンガリーの Eötvös Lóránd 大学日本学科の21歳～30歳の学生が9人だった。実験の方法は、予測する問題点に基づいて選択した語、文、文章をカードに印刷し、読ませるものである。

問題として母国語からの転移が一番よく現れたが、中間言語的な特徴も現れた。日本語の/ei/という二重母音の発音ではさまざまなパターン ([e:], [ej], [ej], [ei]) が現れたので、これが困難なところであることを示す。[e:]は可能な日本語母語話者の発音で、[ej]、[ej]は母語の影響で、[ei]は日本語とハンガリー語、どちらの言語にもないものである。しかし、日本語母語話者が発音した/ei/を含んでいる二重母音をコンピュータで一つのファイルに入れ、語中での/ei/と語末の/ei/を切り取り、その切り取った音を他のファイルにコピーし、比較すれば、結果としては語中の/ei/と語末の/ei/が異なることがわかった。語中では/e/を延ばし、[e:]と発音するが、語末では[e:]ではなく、長い/ei/に聞こえる音を発音する。これはハンガリー人学習者の発音に影響を与えるものである。それゆえ、この点は目標語からも母語からも独立した現象ではないので、中間言語的な特徴として認められないと思われる。

他の中間言語的なデータは母音間の撥音の場合に現れた。「範囲」という語を[hānpi]と発音する被験者もいる。この場合には母語の影響は明確には見えない。音節構造を見ると、CVC.CVである。もともとの音節構造はCVC.Vである。2番目の音節でonsetがないので、より無標のCV音節を作るためにonsetを作りたい。そこで[pi]を使用する。Onsetがないところにonsetを作りたいのは普遍性の現象であると捉えられる。その現象に目標言語の日本語の言語体系が影響を与える。それゆえ、母語の影響がもう見えず、母語から独立しても、目標言語から独立していない。従って、完全な中間言語の現象ではない。

被験者のデータを13人の日本語母語話者に聞かせ、ハンガリー人学習者の発音上、分節音より日本語のアクセントのほうが大きな問題であることも明らかになった。音の高さではなく、固定アクセントで語の第1音節に強勢が来るハンガリー語の影響が明確に現

れる。被験者のアクセントで平板型と頭高型パターンが一番多い。そして文の発音でピッチより、ハンガリー語の主強勢と第2強勢の使い方が多い。しかし、yes-no 疑問文で特徴的な傾向が現れた。たとえば、「部屋に押入れがありますか」という疑問文で、疑問詞の「か」までハンガリー語の yes-no 疑問文のイントネーションで発音してから、「か」が非常に高く発音される。ハンガリー語で疑問文の終わりはさがるので、これは母語の影響ではない。そして日本語の疑問文の終わりは少し上昇するが、ハンガリー人被験者の発音ほどはあがらない。しかしハンガリー語の疑問文末があがらないからこそ、日本語の疑問文末の上昇は母国語から明確に異なるので、「か」があがらないといけないという意識で「か」を非常にあげるといふ現象である。このパターンは他の疑問文でも同じように現れる。疑問文のイントネーションパターンはハンガリー語、日本語、両言語の影響を受けるので、中間言語的な特徴として認められないと思う。

ハンガリー語ではすべての日本語音の対応ペアがあるので、母語からの転移が少ない。Flege & Hillenbrand(1987)は目標言語では母国語で存在する音の対応ペアがあったら、その現象はまったく新しい現象の習得より学習しにくいということを述べた。従って、母語の影響がよく現れる。しかし、ハンガリー人学習者の場合は教育の誤りから生じる問題点もある。たとえば、[u]の発音を[y]として教える場合、摩擦音の[z]と破擦音の[dz]はどんなときどう使うのかが明らかに説明されないこと、無声母音化の規則の説明をまったく無視することはハンガリーの音声教育の誤りである。ハンガリーの日本語教育に音声教育が含まれていない。なぜかというと、ハンガリー人学習者の日本語の発音上の問題を検討する研究がないので、理論的な根拠を与えられるものが存在しない。それゆえ、音声教育がまったく無視され、日本語教育のカリキュラムに取り入れられない。教育があれば、問題点の一部は避けることができるものと思われる。

さらに、被験者の日本語学習歴、日本在住歴と日本語の発音上の誤りの傾向を比較すれば、分節音の発音では相違があるが、アクセントと疑問文のイントネーションでは、日本語学習歴と日本在住歴にもかかわらず母語の影響が強い。

ハンガリー語と日本語のアクセント体系がまったくことなるので、ハンガリー人日本語学習者のアクセント型の知覚と産出、どちらも困難なところである。ハンガリー語では語音に特定の高さがなく、ストレスがあるので、日本語の音の高低が非常にわかりにくい。どこがあがるか、さがるか聞き取れない。そして、聞き取れないので、なにか産出しなければならないのかもわからなくなり、母語のアクセント型を適用することは当然だと思う。しかし第2言語習得の目的はある言語をできれば完全に習得することであるので、そのため母語の影響を減らすのは最初の目的であると思う。それゆえ、ハンガリー人日本語学習者の場合は母語の影響が非常に強く、アクセントの教育は重要である。母語話者と同様の

発音をできなくても、ハンガリー語と日本語のアクセント体系の相違を明らかにすること、ストレスと音の降下と上昇の間の違いを説明すること、日本語のアクセント型について知識をあげることによって知覚と産出も発展し、母語の影響も減少することができるものと思われる。

本稿は3つの目的を持つ。第1の目的は、ハンガリー人日本語学習者の中間言語的な特徴が母国語と目標言語、どちらの言語からも独立したものであるのか、または何か関係が見いだされるのかを調べることである。結果としてはハンガリー人学習者の中間言語的な特徴が母国語か目標言語かどちらも関係があることが認められた。第2の目的は、ハンガリー人日本語学習者の発音上の問題点を明らかにすること。そして、3番目は、ハンガリーの日本語教育の誤りと音声教育の重要性に注意を喚起することである。

ハンガリーではハンガリー人学習者における日本語の発音問題点を分析する研究、音声教育を行うための理論的な根拠を与えるものがなかなかないので、日本語の音声教育は今まで無視された。本稿は具体的な教授法はあげられないが、問題になるところおよびその理由を詳細に説明するので、ハンガリーの日本語教育に寄与できるものと思われる。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、ハンガリー語を母語とする成人が、日本語を学習する際の困難点を、被験者のエラーを分析し、音声学、音韻論、第二言語習得理論の立場から、論じたものである。本論文の目的は、大きく分けて2つある。まず第一に、Corder(1967)やSelinker(1972)に始まる「中間言語仮説」をハンガリー語話者の日本語習得プロセスを観察・分析して、その理論的妥当性を検証しようとするものである。そして第二の目的は、その結果をハンガリー人の日本語教育に役立てようとするものである。

より具体的な論文の構成は次の如くである。全体は5章に分かれたれ、まず第1章では、中間言語仮説が1950年代からの言語理論と関係づけて論じられる。アメリカ構造主義言語学に基づく、Ladoの対照分析仮説(Contrastive Analysis)、それを具体的にスペイン語母語話者の英語習得に応用し、さらに詳細な難易度の予測を試みた、Stockwell and Bowenの難易度の階層(Hierarchy of Difficulty)、生成音韻論の音韻規則と言語類型論的有標性を巧みに組み合わせた、Eckmanの有標性差異の仮説(Markedness Differential Hypothesis)等が主として取り上げられる。

続いて第2章では、母語となるハンガリー語の音声体系の概略が、Ferenc(1994)に基づいて説明される。これは母音や子音などの分節音から、音節、アクセント、イントネーション等の超分節的現象、そして母音調和等の音韻過程にまで及び、特に日本語との比較に重点が置かれている。

第3章は本論文の中核を成す章である。筆者は、被験者の発話データを分析し、誤りの傾向とその原因を論じている。特に詳しく論じられている事象は、母音においては、日本語の[ウ]の音置換の傾向、子音では撥音の誤り、韻律的特徴においては、特定のピッチパターンの誤りが広く観られるという点である。

第4章では、ハンガリーにおける日本語教育の現状が報告され、最終章の第5章では、結論として、ハンガリー人日本語学習者のエラーは、総じて母語の構造や規則を持ち込んでしまう母語からの転移(inter-linguistic transfer)と、目標語である日本語に存在する構造や規則を過剰般化してしまう目標外国語内の転移(intra-linguistic transfer)のどちらか(もしくは両方)によるもので、Eckmanらが論じている、母語からも目標外国語からも独立した現象は観察されないこと、また分節音と韻律を比較すると、韻律の方の習得が難しいと結論づけている。そしてこの理論的考察を受けて、ハンガリー人に対する効果的な日本語の音声教育方法は、まず母語であるハンガリー語と、目標語の日本語の音韻構造を、正確に教え、転移のエラーを防ぐこと、そして分節音よりも韻律、特にピッチアクセントパターンをしっかりと練習させることであると提案している。

次に、本論文の評価の要点を記す。ハンガリー人に対する日本語の音声教育について書かれた博士論文は、本論文がおそらく世界中で最初のものであろう。その点、ハンガリー語専攻語を擁する本学において、このような研究が行われたことは、喜ばしいと言えよう。しかしながら、そのようなパイオニア的な研究であっても、博士論文としての質的な基準は満たさねばならない。この点で本論文にはいくつかの問題がある。以下にそれらの問題点を箇条書きにする。

(1) 論文の形式：本論文は日本語で書かれているが、日本語の用法や文法のミス、英語のスペリングのミス、ワープロの変換ミス等が目立つ。いくら論文は内容が大切で、また日本語のノンネイティブが書き手とはいえ、最低限の体裁が整っていなければならない。この点は、審査委員全員から指摘があったところである。

(2) 論文の構成：第2章では、ハンガリー語の音韻体系のアウトラインが説明されているが、博士論文ということを考慮すれば、この章は不必要であるとの意見も出された。たとえ残すとしても、例文の提示等が、単一の文献に依拠しすぎており、もっと多くの文献に当たるべきであった。

(3) 理論的枠組みの古さ：本研究の音韻論的分析は、Chomsky and Halle (1968)に始まり、分節音の音韻過程を、動的な音韻規則で記述した、伝統的生成音韻論までにとどまっている。Prince and Smolensky (1993)による、最新の「最適性理論」は無理であるとしても、素性階層理論や素性不完全指定理論、そして自律分節理論などを援用すれば、より説得力のある分析が可能だったはずである。

(4) 分析対象の不十分さ：筆者の分析は、主として異音化等、いわゆる後語彙的現象に関してが大部分を占める。連濁等の形態音韻現象も視野に入れるべきであった。

(5) 厳密さを欠く考察：一部に科学的厳密さを欠く部分がある。エラーの原因を、高校教育の結果という、検証不可能な要因に帰したり、統計の数字の読み方が別の解釈も可能であったりする点がそれである。

これに対して、本論文の貢献としては、次の点を挙げることができる。

(1) オリジナリティー：上述の如く、本論文はハンガリー人の日本語の音声習得のメカニズムを解明しようと試みた最初の論考である。

(2) 応用言語学理論への貢献：「中間言語理論」はあくまでも仮説であり、どの程度まで妥当性があるかは、様々な形で検証されねばならない。筆者は、この目的意識に基づいて、自分で実験のデザインを考え、これを実行し、得られたデータを時間をかけて分析し、少なくともハンガリー語・日本語の中間言語音韻体系では、母語と目標語から独立した構造や規則は無いという、一定の結論を得た。これは中間言語においては、必ず独立した部分が存在するという

主張に対する反例となり、中間言語の可変性を示唆することになる。

(3) 実験に関する意義：筆者は研究を進めていく過程で、試行錯誤を重ね、失敗を繰り返し、最終的には、日本人母語話者に知覚的判断をおおぐという、妥当性の高い実験を実施した。特にアクセント習得に関するデータは貴重なものである。

(4) 日本語教育に対する貢献：上述した本論文の結論を繰り返すことになるが、筆者は本研究の結果から、ハンガリー人に対する効果的な日本語の音声教育方法は、まず母語であるハンガリー語と、目標語の日本語の音韻構造を正確に教え、2種類の転移を原因とするエラーを防ぐこと、そして分節音よりも韻律、特にピッチアクセントパターンをしっかりと練習させることであるという2つの結論を得ている。ハンガリーでは、体系だった日本語教育、特に音声教育は、ほとんど行われていない。このような現状を考えると、本論文で得られた結論は、ハンガリーの日本語教育に重要な意味をもつことになる。本研究の結果は、直接的に教場で利用できるのみならず、これを土台にして、将来テキストやワークブック等が編纂されると、より効果的な音声教育を、体系的に実施できる可能性があり、この点において、本論文のもっとも大きな意義は、言語教育面にあると言える。

以上、本論文の欠点と貢献を考慮しつつ、審査委員会は、慎重に可否を論議したが、結果として、本論文には欠点も散見されるものの、その貢献の方が大であり、合格に値するものであるという結論に達した。